

日本ラテンアメリカ学会 会 報

NO. 6

1982年1月1日

第6号目次

1. 第7回理事会報告
2. 学術・文化情報
3. 会員活動報告
4. 56年度科研費
5. 事務局から
ラテンアメリカ研究センター
めぐり

1. 第7回理事会報告

1981年11月27日、9名の理事出席のもとに開催され、理事長及び研究会担当理事より活動報告を受けた後、年報・会報の交換・販売、研究会・定期大会の準備などについて審議を行った。

○ 報告事項

i) 研究会は、東日本部会が10月31日三田千代子、前山隆両氏を報告者として、西日本部会が10月24日大井邦明、野田隆両氏を報告者としてそれぞれ開催された。

ii) マトス・マル教授講演会は、11月18日に「80年代のペルー」をテーマとして開かれた。

iii) 予算執行状況は、4月1日～11月10日の期間に、総収入141万9030円、総支出83万8182円、残高58万848円である。支出が予算案通り進んでいるのに対して、会費納入にかなりの遅れが見られる。

iv) 年報2号への寄稿希望は、論文9、研究ノート1、書評2である。

○ 審議事項

i) 入会を希望した11名について書類を検討した結果、7名を正会員とし、1名を準会員として、入会を承認した。

ii) 収入不足で将来の出版活動が危ぶまれる状態なので、80年度会費未納者10名、81年度

未納者70名に、会費納入の依頼を行うことを決定した。

iii) 他の研究機関・図書館等への年報・会報の送付は、交換を条件に認めることにした。会員・非会員へのバック・ナンバーの販売については、各号ごとにコストを勘案して決定することにした。

iv) 来年3月ワシントンD.C.で開催されるLASA大会へは、増田理事長と国本理事が日本ラテンアメリカ学会代表として参加することを承認した。アンドラーデ理事も都合がつけば学会代表に加わることを決定した。

v) 春季研究会は、1982年4月ないし5月に開催する。

vi) 1982年3月31日を最終締切日として、再度シンボル・マークの募集を行うことを決定した。

vii) 学術会議への登録のための手続きを開始することを確認した。

viii) 第三回定期大会は、1982年6月5日(土)6日(日)開催を一応の目標として、日程の調整に努力することにした。国立民族学博物館所属の学会員に運営委員となることを依頼し、山崎・原田両理事とともに早急に大会準備委員会を組織することを決定した。会報6号紙上で研究発表の希望を募ることにした。

学会シンボル・マークの募集

将来学会の便箋・封筒や発行物に使用するシンボル・マークの図案を会員の皆様から募集してきましたが、1982年3月31日をもって締め切らせていただきます。ラテンアメリカにふさわしい図案を考案中の方は期日内に事務局までお送り下さい。

— ラテンアメリカ研究センターめぐり (4) —
— 筑波大学ラテンアメリカ特別プロジェクト研究組織 —

筑波大学では、広い学問分野の協力が必要な大型の学際的研究を推進する目的で、特別プロジェクト研究組織という制度を設けている。筑波大学の前身である東京教育大学の地理学教室が中心となっ行ってきたブラジル北東部の自然環境調査などの実績にもとづき、筑波大学ではその創設当初より、「ラテンアメリカ研究」が「核物性研究」、「国民体力研究」とならんで特別プロジェクトのひとつとして認められ、若干の準備期間を経て、昭和53年4月に「筑波大学ラテンアメリカ特別プロジェクト研究組織」として発足した。

歴史・人類学、現代語・現代文化学、社会科学、社会工学、生物科学、農林学、地球科学、基礎医学、臨床医学、および社会医学の10の学系(学系とは筑波大学の研究活動の基本組織で、すべての教官は専攻分野に応じたいずれかの学系に所属している)から約40名の研究者が本プロジェクトに参加し、「ラテンアメリカの経済・社会発展と環境」および「国際社会におけるラテンアメリカと日本」という2大テーマのもとに、随時、サブプロジェクトチームを設けて研究活動をすすめている。現在進行中の主なサブプロジェクトには、1) ラテンアメリカの熱帯気候下の自然生態系とその人為変化に関する研究、2) 社会・経済発展の動態に関する研究、3) ラテンアメリカの都市に関する研究などがある。1)のグループは昭和54年度に文部省科学研究費の助成をうけて、ブラジル北東部、ベネズエラ、メキシコへ、地理学、生物学、農学、医学等の各分野からなる総合調査団を派遣しており、2)のグループもまた、ブラジル北東部へ、社会工学、社会学、経済学、歴史学、人類学等の研究者からなる調査団を出す準備をすすめている。

このほか、文部省在外研究員制度、国際研究集会派遣制度などを利用して常時2〜3名の研究者が海外に調査に出ている。一方、国内・国外の研究者を招き、プロジェクト研究員との共同研究に参加していただいている。これまでに招聘した外国人研究者は、Paul Singer(ブラジル・都市社会学)、Mario

Hiraoka(同・人文地理学)、Egon Schaden(同・文化人類学)、R. C. Eidt(アメリカ・地理学)、M. A. Palacios(コロンビア・国際関係論) M. T. G. de MacGregor(メキシコ・社会地理学)、M. A. de Lima(ブラジル・地理学)、M. C. de Oliveira Andrade(同・経済地理学)、Candido Procopio(同・社会学)など多数にのぼっている。

このような研究交流が円滑に行なわれることを目的として、諸外国の大学・研究所との研究交流協定の締結をすすめており、すでにサンパウロ大学およびチリ大学と協定を結んでいる。また、ブラジル北東部地方のペルナンブコ、パライバの両連邦大学および米国ルイジアナ州立大学ラテンアメリカ研究所とも交流協定を結ぶべく協議をすすめている。

日常の研究活動のほか、年1回のシンポジウムと月2回程度の公開講演会・研究会を開き、プロジェクト研究員相互の情報交換と広く大学内外の研究者・学生・一般の人たちへのラテンアメリカ情報の普及にも努めている。

出版物としては、従来、「ラテンアメリカ研究シリーズ」と「年次報告書」を刊行してきたが、このたびこれらを統合し、新たに機関誌「ラテンアメリカ研究」を創刊することになった。当面は年に3〜4号程度、不定期に発行する予定である。

本プロジェクトのオフィスは、「筑波大学中央」バス停に近い「大学公園」前の「共同研究棟」内にあり、各サブプロジェクト用の共同研究室4、プロジェクト長・客員研究員室1、事務・会議・資料室1よりなる。資料室には主要なラテンアメリカ研究誌、書籍、統計資料、および地図類が備えられている。これらの中には、プロジェクト研究員がラテンアメリカ諸国に調査に赴いた際現地機関から直接入手した稀少な資料も少くない。

なお、筑波大学の特別プロジェクトの基本活動期間は5年間とされており、本プロジェクトも昭和58年3月の時点で、その継続・改廃が検討されることになっている。

(松本栄次 記)

2. 学術・文化情報

i) 第18回ラテンアメリカ政経学会年次大会
11月20～21日にわたり関西大学において、次のような研究報告と討論会が行われた。

11月20日(金)

「メキシコ農村の階級構成」 青木芳夫
(奈良大学)

「異文化における米と女性——メキシコの場合」 熊谷明子(東京農業大学)

「ブラジル外交——米伯関係を中心に——」
福嶋正徳(拓殖大学)

11月21日(土)

「ポルトガルの宰相ボンバル侯とブラジル」 住田育法(京都外国語大学)

「ミニファンディオについての一考察」
上田 博(天理大学)

「アルゼンチンの企業構造」 今井圭子
(アジア経済研究所)

討論会「ラテンアメリカと南北問題」

基調報告 木田和雄(関西大学)

ii) 第27回日本イスパニヤ学会年次大会

11月14日(土)、熊本商科大学において、次のような研究報告が行われた。

「動詞 soy 類の語末の y の由来」 有吉俊二

「EL HIDALGO Y EL BANDIDO
—FICCION Y REALIDAD」
Angel Ferrer

「ガルシラソの詩におけるカルロス五世の意味」 本田誠二

「メキシコ女性と食生活」 熊谷明子

「現代スペイン語の無人称文」 三好準之助

「バロック演劇における詩節とリズム——
カルデロン・デ・ラ・バルカの場合」

鬼塚哲郎

「“MI ULTIMO ADIOS” についての
評釈」 安井祐一

iii) スペイン史学会

本会は、1979年11月に20名余りの会員をもって発足した。以後、2年間の研究活動のなかで、会員数は60余名に増え、会員の研究対象は時代的には初期中世から現代まで、研究分野は文学史、思想史に始まり経済史までと

極めて多岐にわたっている。そのことは、下記の研究報告一覧表にもあらわれている。

活動の中心は、隔月にもたれる定例研究会、夏季に行なわれる研究合宿、秋に開かれる大会などの研究活動である。年に3回発行する会報に、それぞれの研究会での報告を掲載し、広く情報を提供している。また、1982年秋の発刊をめざして、現在、雑誌『スペイン史研究』の編集に取り組んでいる。

これまでの研究会での報告は以下のとおりである。

1979年11月18日 若松 隆(中央大学)

「第二共和制下の政党連合」

1980年2月9日 藤田恭子(津田塾大学)

「アナルコ・サンディカリズム(1917-1923)をめぐる一考察」

4月26日 芝 修身(南山大学)

「1492年のユダヤ人追放」

6月7日 飯塚一郎(山梨大学)

「16世紀スペインの経済と経済思想」

6月21日 J. Linz(エール大学)

「フランコ体制から民主主義体制へ」

8月12日 北田よ志子(上智大学)

「盛期中世のサンチャゴ巡礼をめぐる」

8月12日 中塚次郎(東京大学)

「第一共和国期の共和主義と労働運動」

8月13日 橋本一郎(上智大学女子短大)

「第一総合年代記について」

9月6日 松尾佳枝(東京都立大学)

「ラス・カサスとペルーについて」

10月26日 関 哲行(上智大学)

「10-11世紀初頭のアストゥリアス・レオン王国における小土地所有者」

10月26日 山本 哲(愛知県立大学)

「第二共和国憲法の特質」

10月26日 シンポジウム「スペインの近代」

「文学におけるカシキスモ」(野谷文昭
〔津田塾大学〕)

「自由主義とカシキスモ(立石博高〔東京都立大学〕)

11月22日 渡部哲郎(上智大学)

「バスク・ナショナリスタ党(P. N. V.)の人民戦線参加をめぐる問題」

1981年2月7日 小坂かずみ(津田塾大学)

「19世紀末スペインのカノバス体制下におけるJ. コスタの活動(1875-1898)」

- 4月25日 江島 明(東京大学)
「15世紀カスティージャにおける絶対主義の成立とその背景」
- 6月13日 合評会 石原保徳著『インディアスの発見——ラス・カサスを読む——』
コメンター 青木康征(神奈川大学)
松尾佳枝(東京都立大学)
- 7月19日 石渡理子(上智大学)
「12世紀ルネサンスと翻訳活動」
- 7月20日 遠藤雅己(学習院大学)
「『冷戦』下の米西関係を考える——アメリカ外交史の視座から」
- 9月12日 岡住正秀(上智大学)
「1861年Loja 革命について」
- 10月25日 小林一宏(上智大学)
「16世紀のウマニスタ——バスコ=デ=キログについて」
- 10月25日 深澤安博(琉球大学)
「第二共和政急進共和派の農業認識」
- 11月28日 戸門一衛(清泉女子大学)
「フランコ体制の政治経済学」
- 1982年2月, 4月の定例研究会では次の報告を予定している。
- 2月6日 青木康征(神奈川大学)
「『コロンブス研究』の現在地と今後の展望——新大陸発見500周年へ向けて」
- 4月3日 佐々木将実(東海大学) 「カタロニア現代史」(仮題)
- 研究会についてのお問い合わせなどがありましたら, 下記まで御連絡下さい。
- ☎ 187 小平市津田町 1491
津田塾大学国際関係研究所 気付
スペイン史学会委員会

IV) ラテンアメリカ女性学研究会

1981年5月20日に発足した本研究会はこれまでに4回の会合を持ち, 少数ながら専門分野の異なるラテンアメリカ研究者が集まり学際的な研究を目指して地道な活動を開始している。これまでの研究会で行われた報告と次回の子定は次の通りである。

- 1981年7月25日 「アルゼンチン社会における婦人の地位——日本と比較して——」
松下マルタ(南山大学), 「メキシコにおける婦人の法律上の地位」 奥山恭子(早稲田大学大学院)

- 10月24日 「メキシコにおける女性の地位」
Virginia Mesa(メキシコ国立自治大学外国語教育センター・アジア語科々長)
「メキシコにおける女性解放運動の系譜」
国本伊代(中央大学)

- 11月28日 「私のみたサンパウロの女性たち」 三田千代子(サンパウロ大学大学院)

次回3月下旬予定 チリにおける女性解放運動に関する報告2つ

研究会その他のお問い合わせは下記にご連絡下さい。

- ☎ 305 茨城県新治郡桜村 筑波大学共同研究棟内 筑波大学ラテンアメリカ特別プロジェクト研究組織気付 ラテンアメリカ女性学研究会(担当 畑恵子)

V) ペルーに日本人移住史料館が開設

1981年7月4日ベラウンデ・ペルー大統領を迎えて, ペルー日本人移住史料館の落成式が行われた。リマ市の住宅街にある日秘文化会館の2階に新設されたこの移住史料館はラテンアメリカ地域ではブラジルに次ぐもので, 移住してきた日本人がペルーの自然・文化・歴史の中でどのように変わったかを目で見ることのできるような展示室と移民史関係の史料室から成っている。史料室には既に6,000点の資料が集まっているとのこと, 近い将来には移民史研究の重要なセンターとなるものと期待される。なお, 同移住史料館は本学会理事長である増田義郎教授が企画に当たられ, 現在名誉館長の地位にある。

VI) 全米ラテンアメリカ学会1982年大会について

会報第5号でも紹介しましたが, 1年半毎に開催される全米ラテンアメリカ学会(LA-SA)は来る3月4日から6日までの3日間米国のワシントンD. C. においてラテンアメリカ資料収集に関するセミナー(SALALM)と合同大会を開きます。67の分科会, 7つのワーク・ショップおよび23の小討論会が予定され多彩な研究報告と情報交換が期待されていますが, さらにワシントンにおける開催ということで米州機構やラテンアメリカ諸国の大使館などと提携したさまざまな催しものも計

画されています。大会プログラムの内容その他に関心のある方は本学会事務局ないしは下記の住所へ直接お問い合わせ下さい。

LA SA Secretariat
Institute of Latin American Studies,
Sid Richardson Hall
University of Texas
Austin, Texas 78712, U. S. A.

vii) ラテンアメリカ専門書店の案内

米国ロサンゼルスにあるラテンアメリカ古書専門店であるHoward Karno Books, Inc. ではラテンアメリカに関する専門分野別の月報を出しています。関心のある方は、分野および地域を明示して下記へお問い合わせ下さい。

Howard Karno Books, Inc
P. O. Box 64608
Los Angeles, CA. 90064, U. S. A.

viii) アメリカ発見400年を記念して、1892-96年にローマで発行されたコロンブス関係の史料集大成Raccolta di documenti 6部12冊全巻が株式会社文流に到着しています。価格80万円。詳細は〒160新宿区高田馬場1-33-6 平和相互ビル704 (Tel 208-5445) 文流にお問い合わせ下さい。

3. 会員活動報告

i) 第3回定例研究会

○第3回定例研究会東日本部会は、1981年10月31日(土)午後2時から5時すぎまで、上智大学7号館第4会議室で開かれ、12名が参加した。報告者、テーマおよび報告要旨は次の通り。

1. 三田千代子(サンパウロ大学大学院)
「戦前ブラジル日系人社会の経済活動と共同体」
ブラジル日系人の集落形態を①計画植民型、②任意集団型、③官公営移住地型——の3タイプに分け、このうち②および③のケースとしてCotiaおよびBastosの事例を比較検討し、経済活動(国際市場向けから国内消費市場向けへ)の変化が日系人共同体の形成と崩壊にいかなる影響を与えたかについて論じた。

2. 前山隆(筑波大学)「ブラジル移民の

日本回帰運動」
日本移民のブラジル文化への適応過程をアイデンティティとストラテジーの変化の両面からとらえ、いわゆる「出稼ぎストラテジー」(移民=客人モデル)から「永住ストラテジー」(移民=養子モデル)への変遷過程において出現した「転向ストラテジー」(移民=棄民モデル)としての日本回帰運動の系譜を明らかにし、第二次世界大戦後の変貌(新興宗教の台頭)について述べた。

両報告ともブラジル日系人に関する現地調査にもとづくもので、いろいろ興味深い問題を提起したこともあって、活発な質疑応答が行なわれた。特に、戦後のブラジル日系社会を揺がした勝組負組事件を実証的かつ学問的に解明した前山報告に関心が集まった。

○西日本部会第3回定例研究会は、1981年10月24日(土)午後1時半から関西学院大学文学部で開催され、次の二つの研究発表がおこなわれた。

1. 野田隆(愛知県立大)「革命前メキシコの鉄道建設について」

2. 大井邦明(同志社大)「ティンガニオ遺跡発掘調査——メソアメリカ考古学と地域社会」

野田報告は、メキシコにおける鉄道建設の開始から革命に至るまでの期間を対象として、その主体、動機、経済的社会的影響などについて詳細に論及した。大井報告は、報告者が参加したメキシコ・ミチョアカン州ティンガニオ遺跡の発掘調査におけるいくつかの興味ある発見を紹介したのち、このような発掘調査が地域社会に及ぼしたさまざまなインパクトについて論じた。

ii) José Matos Mar 教授講演会

○ 於東京

ペルーの有力民間研究機関であるペルー研究所(Instituto de Estudios Peruanos) 所長で社会人類学者のJosé Matos Mar教授の講演会が1981年11月18日と28日、東京と大阪で開催された。同教授は当初、6月8日の第2回定期大会で記念講演を行なう予定だったが、都合により来日が遅れていた

もの。

東日本講演会は11月18日午後7時から9時まで本郷の学生会館分館8号室で開かれ、18名が参加した。テーマは「1980年代のペルー」(El Perú en la década de 1980)で、スペイン語で行なわれた。まずMatos教授はペルー、ボリビア、エクアドルのアンデス3国がもっている3つの共通点を指摘した。すなわち、第1はエジプト、インドなどと並ぶ古代文明の伝統であり、第2は複数文化および言語(pluricultural y multilingüe)をもった社会であり、第3は従属、低開発状態の第三世界に属することである。こうした中で、ペルーは1968年から80年まで12年間にわたって史上初の制度的な軍事政権下におかれた。同政権は国内統合や従属・低開発からの脱却をめざして72-73年までは種々の改革を実行した。そのうち最も効果をあげたのは農地改革で、その結果latifundioは解体され、協同組合や中小生産者にとって代わられた。しかし教育改革や企業改革などその他の改革はうまくいかず、73年以降は後退をみせ、社会経済危機を招来する結果となった。この間の大きな社会変化は都市化の進展(都市化率は1940年の35%から81年には65%へ上昇)であり、それに伴うbarriadasの増大(リマの全人口の50%を占める)である。特に農村、都市の周辺層を吸収するsector informalの台頭が目立っている。このような状況の中で、1980年に軍事政権のあとを引き継いだベラウンデ文民政権は経済自由化政策によって難局に対処しようとしているが、これは対外債務の増大をもたらし、経済危機を深める結果となっている。しかし左翼勢力が18のグループに分裂していることもあって、1980年代のペルーの見通しは明るいとはいえないとMatos教授は結んだ。

講演後、質疑応答が行なわれたが、質問はもっぱらbarriadasとsector informalに集中し、両者の関係や後者の実態、経済全体に占める地位などについて質問が続出した。講演のテーマが大きすぎてやや焦点が定まらないくらいはあったものの、討論の盛り上がりによって問題点が浮彫りにされたのは有意義だった。(水野 一)

○ 於大阪

関西地方でのホセ・マトス・マル氏の講演会は、1981年11月28日(土)午後2時から、大阪市大経済研究所でおこなわれた。参加者がすくなくため、予定されていた「アンデス地域とラテンアメリカ」についての講演はとりやめ、現代世界におけるペルーの位置づけについてのマトス氏の簡潔な講演をめぐって出席者からの質問にマトス氏がこたえるという形ですめられ、4時半閉会した。折角の機会なのに会員の参加がごく少数だったのは残念であった。(山崎春成)

4. 各種研究費補助金を受けたラテンアメリカ地域関係課題一覧

i) 56年度文部省科学研究費補助金

[一般研究D]

○「中南米のカプトゴケ属地衣類の化学分類」
吉村 庸(高知学園短大)

[海外学術調査]

(1) 現地調査・本調査

○「南米ボリビア共和国およびチリ共和国アンデス地帯の多金属型熱水鉱床に関する地質学・鉱床学的調査」(ボリビア・チリ)
荻木浅彦(東北大)他4名

○「ブラジルのノルデステ社会・経済の動態に関する学術的実証的研究」(ブラジル)
碓氷 尊(筑波大)他9名

○「中南米、特にペルーおよびエクアドルにおける肺吸虫症の病態生理学的研究」(ペルー・エクアドル) 横川宗雄(千葉大)他7名

○「中部アンデスの地球物理学的調査」(ペルー・チリ・ボリビア・アメリカ) 河野長(東工大)他8名

○「中央アンデス農牧社会の民族学的研究—垂直統制と環境利用」(ペルー・ボリビア・チリ) 増田義郎(東大)他6名

○「南米大陸における広鼻猿類の系統・進化に関する研究」(コロンビア・ボリビア)
近藤四郎(京大)他5名

○「メキシコおよびグアテマラ地域における栽培植物の調査」(メキシコ・グアテマラ)
田中正武(京大)他3名

○「重力計定数の高精度決定および国際重力

基準網1971年の維持改良に関する研究」(アメリカ・カナダ・メキシコ・コロンビア・ペルー・チリ) 中川一郎(京大)他8名

- 「南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究」(メキシコ) 野村暢済(九州大)他7名
 - 「チリ中南部における氷河の変動と気候変動」(チリ) 野上道男(東京都立大)他3名
 - 「日本人食生活の基本的パターンに関する公衆栄養学的研究」(ブラジル) 沖増哲(広島女子大)他5名
 - 「南米における隠花植物の分化と分布に関する研究——特に東亜関連群について」(チリ) 井上浩(国立科学博物館)他6名
- ii) 調査総括

- 「中部アンデス火山帯の地球化学的調査研究」 小沼直樹(筑波大)
- 「ボリビア国チャカルタヤ山(5,200m)での空気シャワー現象の測定調査」 俣野恒夫(埼玉大)
- 「アンデス中部地域の古・中生界の生物層序学的研究」 坂上澄夫(千葉大)
- 「ブラジル南部外国人移住地域における住文化変容に関する比較調査」 上田篤(大阪大)
- 「南部の哺乳類の進化に関する古生物学的研究」 高井冬二(進化生物研究所)

ii) トヨタ財団 56年度研究助成

トヨタ財団が研究助成をはじめから今年で7年になるが、これまで助成金が与えられたラテンアメリカ関連のテーマは次の2件である。

- 53年度
「キャッサバ澱粉の無蒸煮アルコール発酵に関する研究」 上田誠之助(九州大)他1名
- 56年度
「現代和葡辞典の編纂」 佐野泰彦(上智大学)他4名

iii) 日本学術振興会 57年度国際共同研究
人文・社会, 数物, 化学, および生物の4部門で採択された計26件の中次の2件がラテ

ンアメリカ地域に関連したものであった。

〔人文・社会系〕

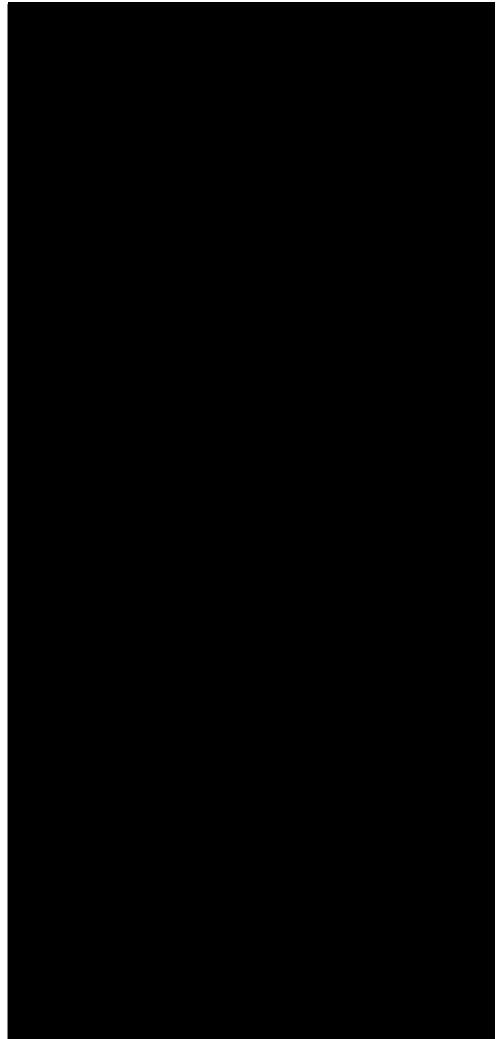
「発展途上国社会への日本移民の環境適応・同化および貢献に関する実証的研究——ボリビアにおける日系人社会の実態調査を中心として」(57年4月～59年3月) 若槻泰雄(玉川大)他日本2名ボリビア2名

〔生物系〕

「視蓋における知覚情報の相関について」(57年4月～59年3月) 伊藤博信(大阪大)他日本2名ベネズエラ3名

3. 事務局から

i) 会員名簿記載事項の修正・変更



1982年度大会について

日本ラテンアメリカ学会第3回大会は、6月5日（土）および6日（日）の2日間にわたって大阪の国立民族学博物館で開催されることに決定しました。シンポジウム、研究報告、記念講演などが計画されております。つきましては、研究報告に関して分科会を編成するために報告希望をとることになりました。同封の葉書に研究報告のテーマをご記入のうえ、1982年2月20日までにご返送下さい。

筑波大学ラテンアメリカ特別プロジェクト ☎0298-53-2380

西日本部会

山崎春成理事 大阪市住吉区杉本町

大阪市立大学経済研究所 ☎06-692-1231

iii) 住所、勤務先等の変更がありましたらお知らせ下さい。海外に長期滞在される場合にも、滞在先住所および滞在期間と合わせて、その旨ご通知下さい。

iv) 会報を一層充実させるために、各地で開催されている研究会、会員諸氏の研究活動報告など、お送り下さい。

v) 著書および論文抜刷等をご寄贈下さい。会員の方々の業績を系統的網羅的に学会事務局で収集整理して保管し、閲覧のため公開したり、文献目録作成の資料にしたいと考えております。既に相当数を受領しておりますが、一層のご協力をお願いします。

vi) 1981年度会費（正会員5千円、準会員15ドル）を未納の方は、下記のいずれかへお払い込み下さい。

○郵便局振替口座 東京1-13630
（日本ラテンアメリカ学会名義）

○第一勧業銀行渋谷支店普通預金口座
1262358（日本ラテンアメリカ学会
代表 増田義郎名義）

ii) 1982年春季定例研究会

次の定例研究会は東日本部会、西日本部会とも4月ないし5月に開催することになりました。報告を希望される方は早目に下記へご連絡下さい。

連絡先

東日本部会

水野一理事 東京都千代田区紀尾井町7

上智大学外国語学部 ☎03(238)3706

細野昭雄運営委員 茨城県新治郡桜村

No. 6 1982年1月1日発行

日本ラテンアメリカ学会事務局

☎153 東京都目黒区駒場

3-8-1

東京大学教養学部第8本館

中南米分科気付

☎03(467)1171

内線581